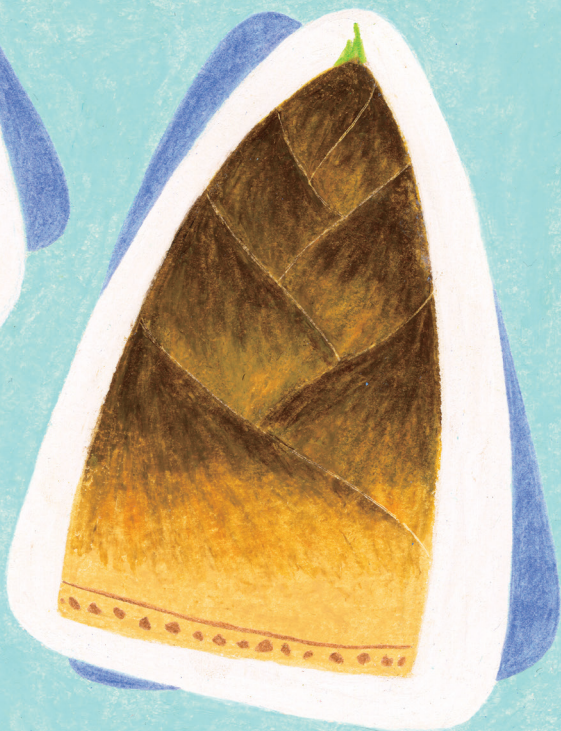
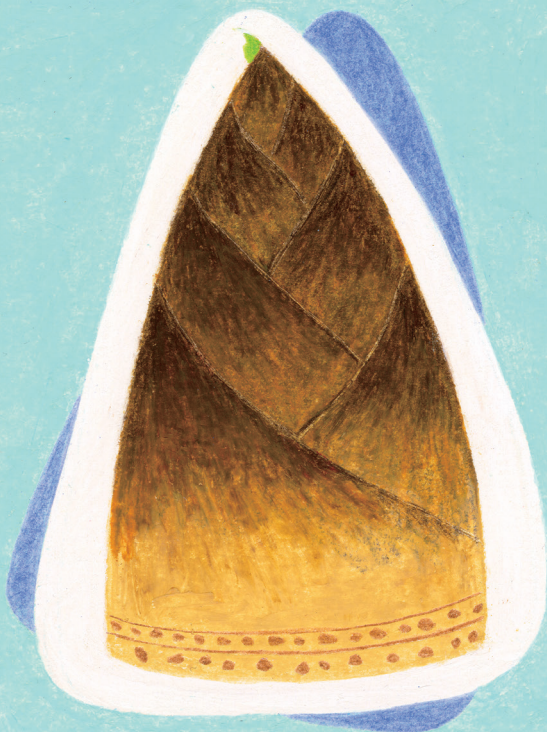
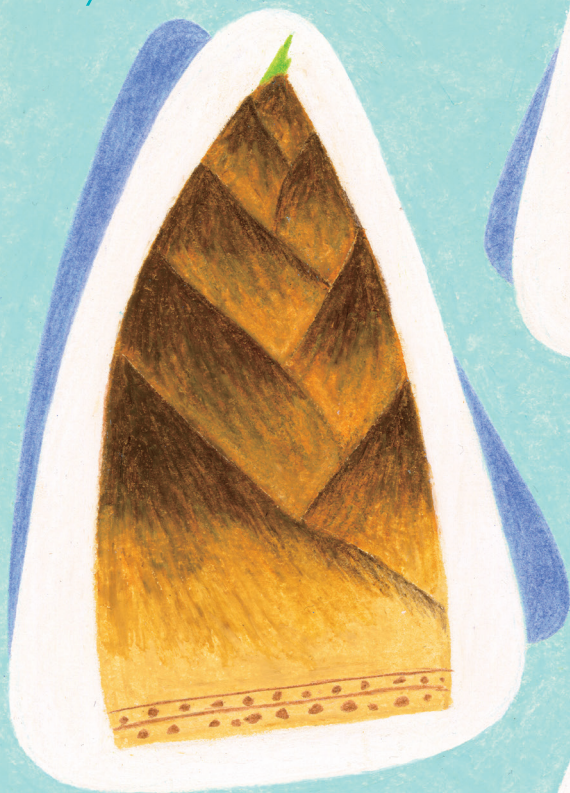


禅の友

Zen no Tomo

5

May 2025





ご本山だより

大本山永平寺【若さ溢れる季節】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



五月の永平寺は若々しい力に溢れている季節です。

今年は二月から三月にかけて六十名ほどの修行僧が新たに上山してきました。彼らは四月三十日までは暫到、いわば見習いの修行僧として生活してきました。そして五月一日、新到掛搭式が行われ正式に永平寺の修行僧の一員として認められます。その儀式では修行の根本の場所である僧堂、ご開山さまのご真廟である承陽殿、貫首である禅師さまに謁見する光明蔵の三カ所で懇ろに礼拝をします。新到和尚たちは、緊張した面持ちで礼拝をしますが、心の中は喜びに満ち溢れていることでしょう。

それから一週間後、夏安居が始まります。安居とは道場にとどまり修行に専念することです。二月中旬から五月六日までの間、上山してくる者もいれば永平寺を下りる者もいます。修行する仲間の顔ぶれが変わっていくのです。しかし五月七日を迎えると、八月九日までの間は出入りすることが出来なくなります。つまりこの日、山内

に残っていた者たちは三カ月間同じ顔ぶれで永平寺に籠ることになるのです。前日の五月六日の夜、指導者を含めた山内にいる全ての僧侶が一堂に会し、この三カ月間皆で和合していくことを誓いあいます。

実際に安居が始まると、まだ修行生活に慣れない新到和尚も多く、失敗を繰り返しながら必死に日々の生活を行じていきます。古参和尚も自らの生活に精進をしながらも、精一杯新到和尚の補助をします。皆で協力し励まし合いながら修行をする姿からは、初々しくも力強く、清らかで澄んだ爽やかさを感じられるのです。

それはまるで境内の木々に盛んに茂る若葉のようです。朝のお勤めの後参道を歩くと、トンネルの様になった樹々の新緑の隙間からは陽が差し込み、若葉が輝きます。川を勢いよく流れる水の音を聞きながら、まだ少し冷たい風を浴びれば心地よいながらも身が引き締まります。永平寺を抱く大仏山全体が高祖・道元さまの教えに則り修行に専念しているかのようです。



ご本山だより

大本山總持寺

【制中五則】
せいちゅうごそく

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二二



皐月五月、風薫るさわやかな季節の到来になりました。

「薫風何処来たり、我が庭前の樹を吹く啼鳥繁陰を愛し、飛び来たりて飛び去らず」

明時代の政治家、干謙の詩を思い出します。

「かぐわしい初夏の風がどこからかやってきて我が家の庭先の樹々を吹き過ぎる。啼く鳥は繁った木陰を愛して飛んできてそのまま飛び去ろうとはしない」そんな意味でありましょう。總持寺境内の沢山の樹木もそこを通り抜けてくる風はまさに若葉や青葉の香りを含んださわやかな風であって、百間廊下を歩いていると頬にあたる風が薫風そのもののなのです。人も鳥もすべてが心地よさを憶えるのでしょう。

さて總持寺本山僧堂では四月より

夏安居制中という一〇〇日間の修行期間に入っております。

特に本山では五月十三日から十七日にかけて「制中五則」という大切な行持が行われます。

その五日目には「首座法戦式」のクライマックスを迎えます。大勢の修行僧の先頭に立って指導するリーダーを「首座」と呼びます。

当日は石附禪師の命を受けて大勢の修行僧と禅問答を交わします。この法戦式では首座は修行で培った全力量を発揮し、緊張感の漲る場面が展開されるのです。この五則が終了するとようやく一〇〇日間の修行期間の半分が終わり、また更に首座を中心として修行が続いていき互いが協力し合うことで乳水（乳と水が溶け合う様）のように和合していくのです。

選・坊城俊樹

さざ波の遊び心や櫻貝

大阪府 柏原 才子

【評】櫻貝というあの小さくて可愛くて桜色の姿はとにかく俳句の題材としては格好のもの。しかしこの句はそこにさざ波という登場人物がやって来た。さざ波の悪戯にもてあそばれている貝のとまどいのようなものもあつて楽しい。小さな波との出逢い。

早春に恋をみつけし目白かな

愛知県 後藤 美帆

【評】まだ早春のころあの可憐な目白が枝先にやつてきた。するとそこにはまた別の可愛らしい目白が。彼はどきどきしながらだがすぐに恋してしまふ。この句は目白という鳥のあの可愛らしく独特の目をした姿があるからこそ恋のストーリーが成就した。

◆ かまぐらの神へ子ども膝正し

岐阜県 大下 雅子

◆ 一斉に潮風を浴び野水仙

静岡県 堤 柳泉

◆ しづかなる百の嘆きや涅槃像

岡山県 角脇 隆子

◆ 枯菊の捨てるに惜しき香の残り

兵庫県 松井 弘子

◆ 女正月体重計は電池切れ

山口県 菅 和子

◆ ころぶなよ風邪引くなよと子の電話

長崎県 崎田 定雄

◆ サークスの火を噴く女初景色

埼玉県 伊藤 博

◆ 赤き糸針に結びて針納め

東京都 鈴木 英治

◆ 白梅の揺るる一枝に番つがひかな

神奈川県 佐野 勇

◆ 眼の癒えて春のひかりをじつと見る

三重県 荻屋 奈良美

選者吟

アンモナイト一億回の春を巻く

俊樹

【作句小見】

アンモナイトとはおそらく一億年くらい前の大きな巻き貝。もちろん化石でしかないのだが、あの正確な渦を巻いている姿を見ると一億回の春が想像された。しかしよく考えると地球にその時代のような春が存在したかは不明である。

選・長澤 ちづ

教え子の名前と顔は忘れない老いてあらかた忘れかけても

宮城県 阿部 澄江

評

現役時代、教師をしておられた作者なのだろう。高齢になり、いろいろな不如意が多くなってきたとは言え、教え子の顔と名前は忘れていないと詠う。真心を込めて一人一人の教え子に向き合えばこそ言える言葉であろう。

雪の朝南の国へ旅に出る赤きリュックを背負ううれしさ

秋田県 小松 紀子

評

この冬は殊に豪雪で、雪国の冬の暮らしの大変さをニュース等で目の当たりにした。雪のない「南の国へ」旅立つ浮き立つ心が「赤きリュック」に象徴的である。

◆ 決断と言ふには遠く諦めのための落ち葉を幾つも拾ふ

岐阜県 後藤 進

◆ 忘れまじ秩父事件の有りしこと墓所の紅梅咲きけるごとに

埼玉県 新井 巳喜雄

◆ 仮免許に落輪したるクラシクをたわやすく過ぐ高齢者講習

愛知県 館 一子

◆ そくそくと這ひ寄る冷気の納骨堂永劫不言の静けさのなか

北海道 佐賀 幸子

◆ 節分の後^{のち}に轟く春雷に福豆茶^{まめぢや}楽しむ母に倣いて

静岡県 杉原 民子

◆ 嫁ぎ来し時の針箱にチャコヘラはかの日の顔して隅に寂しげ

愛知県 深谷 ハネ子

◆ 鍋^{・・・}すりとふおこげに番茶かけてすする子どもの頃の懐かしき味

島根県 宇津 美枝子

◆ 大いなる巨人のさまに転がれるテトラポッドを春潮叩く

島根県 徳本 義則

◆ み寺への雪のわだちを踏みて行く今日は涅槃会写経の日なり

岡山県 塚本 登志子

◆ たこ天とたこ飯もとめて帰り来ぬ港近くの小さき祭に

広島県 徳永 進一郎

選者詠

鳥の名は分からずとも良し窓近くわれに飛び来てうたいくるれば

ちづ

作歌小見

後藤さんの一首、高齢故に決断せねばならないことが増えてきたことへの忸怩たる思いが、落ち葉に託されています。徳本さんの一首では「春潮叩く」の結句が、無機質なテトラポッドとの対比で効果的に働いています。